



遠

山

鹿

子

六編

^13
3902
8





遠山鹿子

種彦作

丙申春

六編上

遠山鹿子
六編上

天保丙申孟春發販

柳亭種彦作
歌川國貞画

御詠染

遠山

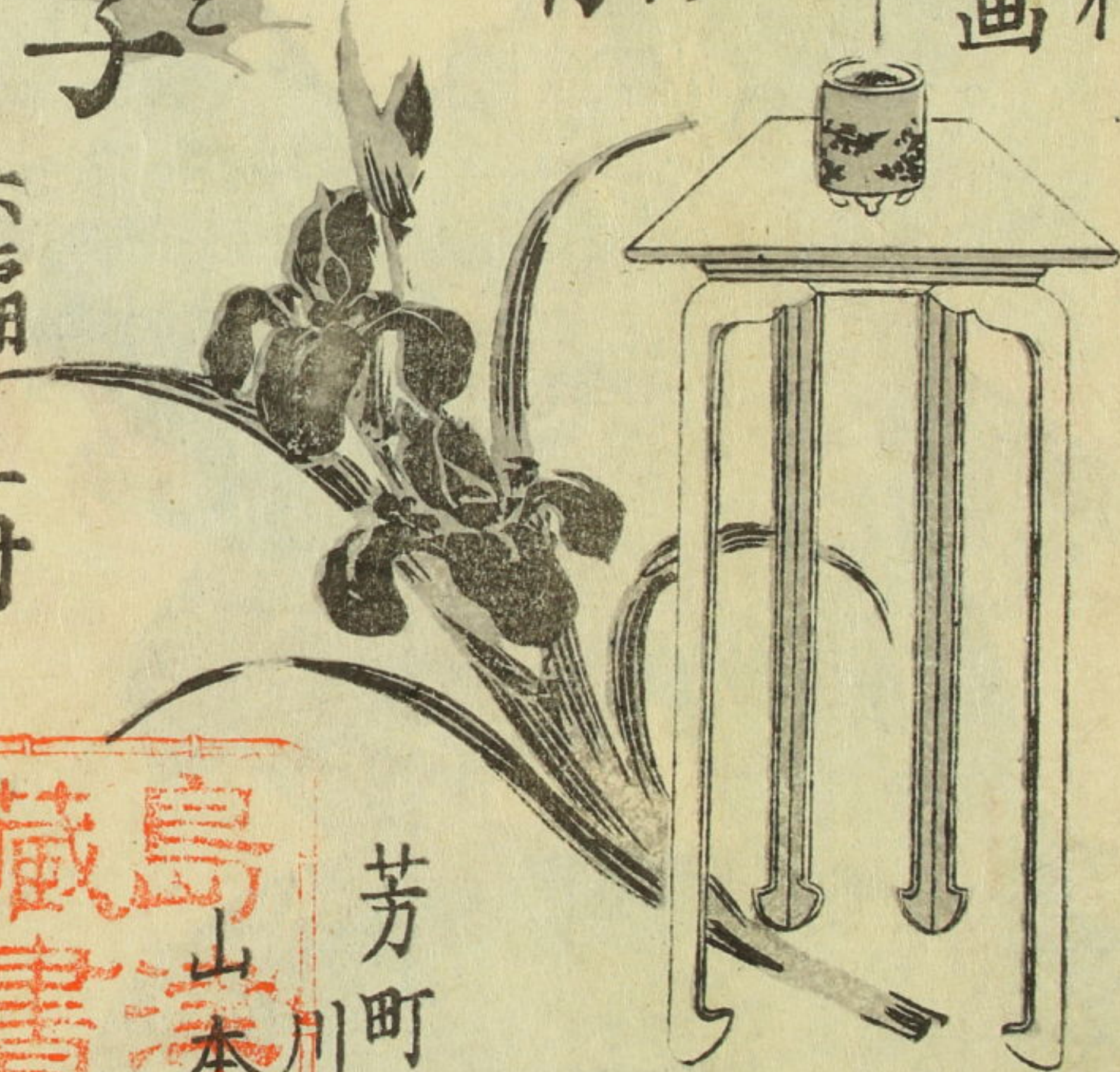
庶子

六編 上冊

島藏書

芳町 川岸 板屋

3902
8



さて 偕老の後の明晩と歎を討せぬ講釋仕り張扇の張合めて人の
多く集り。續物の繪草紙も又來年と後と合せて御見
物と待てる上自の足ふ異なる事なることのみまてもを拙作の
五年以前の年玉のりらふと終らちるる崩の荒しと不破の
閑をよめてあつた縮妻のたす見ゆる人ゆるく入のあつたの必定
ゆゑ據るまか座敷とかつたけふしとたり消とまがれ果る反魂
香さるるも席亭栄久堂所定連へまよぬとてを理ふ机をつき
つけられまよぬ筆の讀切講釋又來春も相かたつて世話と
時代の前後座後座其標題の末ふ載ら

天保丙申初春

柳亭種彦

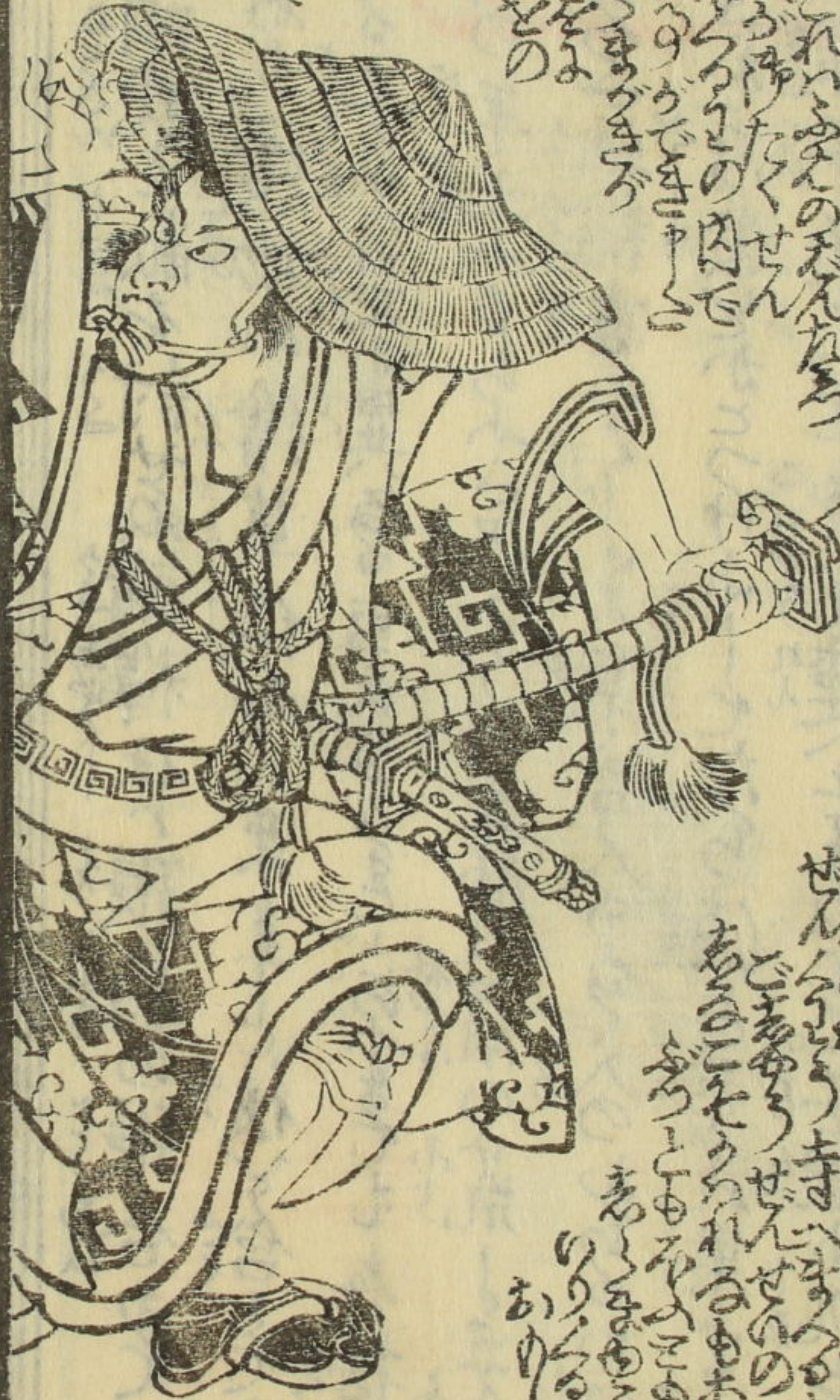
元禄中森田庵狂言

なまのや大全

元祖市川團十郎自作

不破伴左衛門のせりふ

▲さきさきとて(一歩めん)
るまされうまこれいふそのえんたう
あつてう大人かたやくせん
こんと怪あつるふこの内と
でうりあつるいふうでま
大門あつるいふうでま
のいもあつるいふう
里のいもあつるいふう
せきさきとて
あつるいふう
ひつぼうを立て
うかうのうひて
このあつるいふう
と大いふう
せんがう
まうとされ



一ツあつるいふう
女あつるいふう
えのいふう
だまを
あつるいふう
馬のいふう
せんがう
あつるいふう
あつるいふう

どてきぬれの
ま大あつるいふう
そくの日のあつるいふう
よふいひあつるいふう
かふあつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう



今をよめあつるいふう
たをよめあつるいふう
えんがあつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう
あつるいふう



伴左衛門
女房
阿茶



名古屋
山崎
於妻
梶

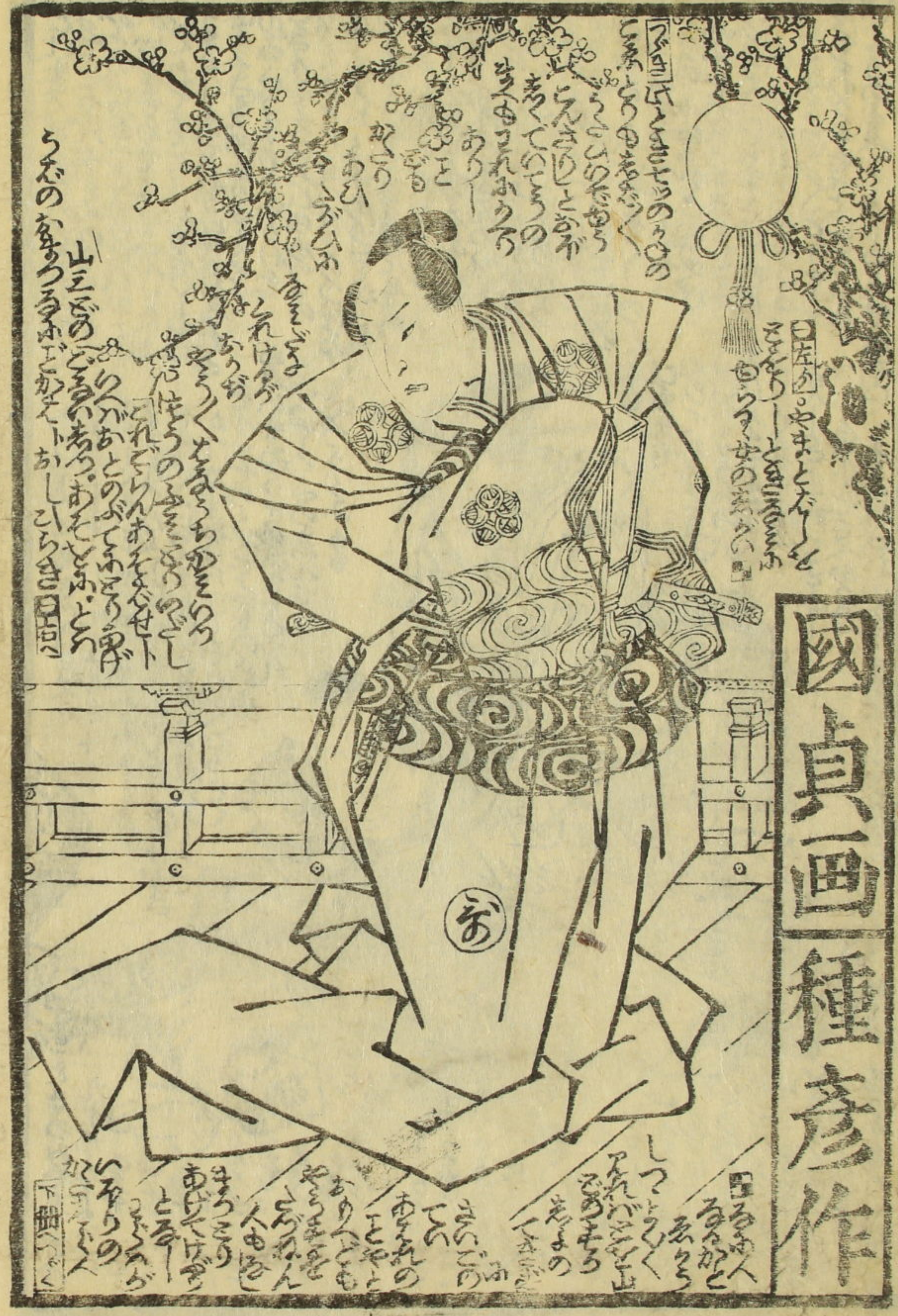


わが心も
わが身も
わが命も
わが財も
わが色も
わが声も
わが味も
わが触も
わが思も
わが行も
わが住も
わが命も
わが財も
わが色も
わが声も
わが味も
わが触も
わが思も
わが行も
わが住も



その心も
その身も
その命も
その財も
その色も
その声も
その味も
その触も
その思も
その行も
その住も
その心も
その身も
その命も
その財も
その色も
その声も
その味も
その触も
その思も
その行も
その住も

國貞画種彦作



柳亭種彦作 歌川國貞画 合巻標題

御詠染遠山鹿子 六編四冊

乙月の館の場より日田峠の大尾まで年々出板の續狂言
天保丙申春新彫乙未の霜月より 無相遠賣出

時代違 風俗江湖傳 八冊

三扇古渡佐羅紗 全六冊 二編あり書切り

以上二種天保丁酉新彫申冬より發市
芳町川岸おやぢ橋角 栄久堂 山本屋平吉梓



國貞画

おやぢ橋角
山本屋
平吉板

六編下

1

島津
藏書

島津